

Sir John DaviesのGulling Sonnets (1594)

著者	箭川 修
雑誌名	東北学院大学論集. English language & literature
号	102
ページ	1-31
発行年	2018-03-15
URL	http://id.nii.ac.jp/1204/00024287/

Sir John Davies の *Gulling Sonnets* (1594)

箭 川 修

序：ソネット理解のための基礎知識：脚韻構成と論理構成との相関

奇妙なソネット集が存在する。献呈ソネットを含めてわずか 10 篇からなるこのソネット集は、じっくり検討してみると、その要素のすべてが奇異と言えるほどの特異さに満ちているのだが、最初に目を引いたのは、冒頭に付された献呈ソネットに見られる、脚韻構成と論理構成との間に存在する違和感であった。こうした違和感を理解するためには、英詩批評の基本に立ち返り、ソネットに関して集積されてきた常識と言えるものを確認しておく必要があるだろう。

ソネットを分類する際の基本的なカテゴリーとして、イタリア風ソネット (Italian sonnet)／イギリス風ソネット (English sonnet)、あるいは、ペトラルカ風ソネット (Petrarchan sonnet)／シェイクスピア風ソネット (Shakespearean sonnet) という区分が考えられる。一見したところ、「イタリア風」は「ペトラルカ風」と、「イギリス風」は「シェイクスピア風」とほぼ同義と捉えられているふしもある。しかしながら、根拠薄弱な個人的な感覚かもしれないが、ペトラルカ風ソネットをイタリア風ソネットと呼ぶことにそれほどの躊躇いはないが、イタリア風ソネットをペトラルカ風と呼ぶことにはかなりの違和感がある。同じように、シェイクスピア風ソネットをイギリス風ソネットと呼ぶことにそれほどの問題は感じないが、イギリス風ソネットをシェイクスピア風ソネットと呼ぶことには躊躇

いを感じる。なぜか、それぞれに互換性を持つかに見える用語は完全に等価とは思えないからだ。韻律構成という視点からすれば、「イタリア風」と「ペトラルカ風」は、また、「イギリス風」と「シェイクスピア風」はほぼ等価であると言っていいだろう。ならば、問題はそれ以外のところに、恐らくその一つは（文学批評の常識の一部として）韻律構成と対応すると考えられてきた論理構成と関係がある。

韻律構成から見て、シェイクスピア以前にも「イギリス風」と呼べるソネットは数多く存在していた。また、シェイクスピアのソネット集の出版が1616年であり、批評の領域で「シェイクスピア風ソネット」という用語および概念が確立していくのはさらに後のことになるため、シェイクスピア以前にイングランドで創作されたソネット作品にシェイクスピア風ソネットに見られる特徴が顕著に現れることは期待できない。〈シェイクスピア風ソネット〉は特殊な理念的存在と捉える必要がある。似たような事情は「イタリア風」と「ペトラルカ風」にも当てはまる。ただし、こちらで中心的な問題となるのは、論理構成以上に〈ペトラルカ風 Petrarchism〉と言われる思考様式および言語表現・表現技法であろう。

シェイクスピア風ソネットの脚韻構成は厳密である。abab cdcd efef gg と連ねられる詩行は、基本的に4+4+4+2と分割される。つまり、全体は4行連 quatrain が3つと2行対句 couplet 1つから構成されている。また、シェイクスピア風ソネットは脚韻構成に論理構成を巧妙に重ね合わせる、Quatrain 間の脚韻の差異がそれぞれの quatrain 内部の言説の差異を視覚化ないし聴覚化するとともに、交差韻 cross rhyme が——時に〈起承転結〉とも言われるような——論理の進行性・展開性を裏書きする。イギリス風ソネットの脚韻構成はシェイクスピア風ソネットほど厳格ではないし、厳密な〈起承転結〉の論理構成が常に備わっているわけでもない。

イタリア風ソネットにも韻律構成に相関する論理構成がある。イタリア風ソネットは前半 8 行の octave と後半 6 行の sestet から構成され、octave と sestet の間には volta (turn) と呼ばれる転回点が置かれる。Octave の脚韻構成は abba abba が主流であるが、この構成は、脚韻を 2 種類に限定することによって、octave 内部での言説のまとまりを保証するとともに、畳み韻 enfolding rhyme によって論理の進行性を食い止めている¹。Sestet の始まりとともに、脚韻には新しい音が導入される。Sestet の脚韻構成は cdcdcd cdecde などを中心にしながら多様なヴァリエーションを展開する。とは言え、伝統的な構成では、cdcdee や cddcee, ccddee というような、couplet に近づきそうな脚韻は忌避されていたようだ。

イタリア風／イギリス風。ペトラルカ風／シェイクスピア風以外にも、脚韻構成と論理構成との組み合わせを根拠とするソネットのカテゴリーはいくつか存在する²。その中で注目しておきたいのは、スペンサー風ソネット (Spenserian sonnet) である。『妖精の女王』*The Faerie Queene* (1596) のスタンザ構成 (ababbcbcc) から導出されたと説明される場合もあるが、abab bcbc cdcd ee という脚韻は quatrain 内部での論理の独立性を否定し、論理を鎖状に編成・展開しつつ、有機的全体として言説をまとめ上げる。ただし、8 行目と 9 行目の間に volta が存在している場合も多いとされる。

以上のように、韻律構成という〈形式〉と論理構成という〈内容〉に相

1 ソネット形式がイタリアからイギリスに輸入され定着していく過程で、なぜ脚韻構成に変更が必要であったかに関する常識的な説明は、イタリア語と英語の文法構造の違い——イタリア語の方が格変化などによって同音の脚韻語を見出すことが容易であるのに対し、英語は語幹が剥き出しになることが多く、同音の脚韻語を探し出すことは困難であったため——と言われている。しかし、イタリア風で主流であった enfolding rhyme がイギリス風では cross rhyme に取って代わられたことを説明する記述には出会ったことがない。

2 Nelson Miller. "Basic Sonnet Forms" (<http://www.sonnets.org/basicforms.htm>) の記述が簡便である。

関を認めるところから英詩理解の基礎が存在する。もちろん、韻律構成にせよ、論理構成にせよ、両者の緊密な関係にせよ、すべては理念という抽象に過ぎず、現実が作品ごとに異なることは間違いない。

1. 奇妙なソネットの韻律構成と論理構成

冒頭に「奇妙なソネット集」と紹介したのは Sir John Davies (1569-1626) の *Gulling Sonnet* (1594) である。献呈ソネットの韻律と論理構成を確認してみよう。

Gulling 1.

Here my Cameleon Muse her selfe doth chaunge
To divers shapes of gross absurdities,
And like an Antick mocks with fashion straunge
The fond admirers of lewde gulleries.
Your judgment sees with pitty and with scorn
The bastard Sonnets of these Rymers bace,
Which in this whiskinge age are daily borne
To their owne shames. and Poetries disgrace.
Yet some praise those, and some perhappse will praise
Even these of myne : and therefore thes I send
To you that pass in Courte your glorious dayes,
That if some rich, rash gull these Rimes commend,
Thus you may sett his formall witt to schoole,
Use your owne grace, and begg him for a foole.

J. D.

脚韻構成は abab cdcd efef gg であり、形式上は間違いなくイギリス風と言える。イギリス風であれば、abab cdcd efef gg という（厳格さの程度につい

ては捨象するにして) 論理構成が存在することが予想される。しかしながら、実際の論理構成は abab cdcd efef gg を要請し、シェイクスピア風であれば作品を締め括るはずの couplet が独立できず、‘[so] that ... may’ 構文の内部に、if 節の帰結として配置されている。この部分の詳細については後に検討する。

以下にソネット集本体と言える全 9 篇の脚韻構成を掲載する。比較的明確に思える論理の切れ目には斜線を入れた。

Dedication	abab/ cdcd/ efef/ gg
Sonnet 1	abab/ abab/ cdcd/ ee
Sonnet 2	aba/b abab/ cdcd/ ee
Sonnet 3	abab/ abab/ cdcd ee
Sonnet 4	abab/ cdcd/ efef/ gg
Sonnet 5	abab/ cdcd/ efef/ gg
Sonnet 6	abab/ abab/ cdcd/ ee
Sonnet 7	abba/ abba/ cdcd/ aa
Sonnet 8	abba/ acca/ dede/ ff
Sonnet 9	abab/ abab/ cdcd/ ee

全体として考えると、それ程の統一感はない。Cross rhyme が主流を占めているが、第 2 quatrain は第 1 quatrain の abab を繰り返すものと、cdcd に移行するものがある。特徴的なのは、表面上は明確にイギリス風ソネットの脚韻に見える献呈ソネットとソネット 4 番および 5 番だろう。しかしそこにシェイクスピア風の論理構成が存在しているという保証はない。

詩行を enfolding rhyme で始めると、俄然イタリア風への期待が高まる。

Sonnet 7 は最終 2 行が cd であれば純粹イタリア風になりえた作品かもしれないが、実際には 1 行目と最終行を同一にするというこの詩特有の目的によって aa が生じている。それでも後半 6 行を cacaca という具合にまとめる手はあったかもしれない。

ソネットの脚韻構成について想起すべきは Sir Philip Sidney の *Astrophil and Stella* (1591) と Edmund Spenser の *Amoretti* (1594) であろう。108 篇からなる『アストロフェルとステラ』はイタリア風を基調としながらも——作品集の随所で言及されているように——イタリア風の反復であることを忌避するかのように、また、ソネット創作の即興性を誇示するかのように、様々な脚韻を案出・提示してみせる。他方、スペンサーの脚韻は、先に紹介したように、堅牢な構築性を誇り、その場で請われて創作したなどという気配は微塵もない。連作ソネットとしての性質も同様かもしれない。以前にシドニーのソネット集について論じた時に提示したのは、折々に創作され、紙葉（手稿 Manuscript）に書き込まれたソネットを並べ替え、納得できる配列を検討する——後付けで連作に筋を捻出しようとする——詩人の姿である³。実際、『アストロフェルとステラ』を物語として追いかけて行こうとすると、筋の断裂や跳躍が多い（この特徴それ自体が詩人の恋物語の現実を反映していると言えないこともない）。スペンサーの『アモレッティ』から想起される映像は全く異なる。*Epithalamion*（祝婚歌）と抱き合わせにすることで、スペンサーは『アモレッティ』に——結婚という——物語の終着点を確保している。物語の筋は緊密で、数秘学的な要素さえ縦横かつ緊密に組み込まれている可能性もが指摘されてい

3 箭川修 「〈文化の美学〉と『アストロフェルとステラ』」、箭川修、佐々木和貴、川田潤著、『新歴史主義からの逃走』（東京：松柏社、2001年）、207-208。

る⁴。

2. 初期近代と近代：Public の意味

さて、本論が考察の対象とする〈ソネット集〉が流行した時代はルネサンスないし初期近代に当たる「ルネサンス」は暗黒の中世からの脱却という意味合いが強いが、文芸復興という社会の志向性を語りもする⁵。他方、「初期近代」という名称は、現代という位置から視線を遡らせ、近代に至る途上に存在した——時に中世から脱却し切れない——時期として、近代に至ってようやく完成される性質を未完の萌芽の状態として提示するような時代を表現するのかもしれない。いずれにしても厳密な定義は困難であるが、初期近代と近代を識別するための有力な手掛かりの一つとして、“make public”あるいは“publish”という表現の内包や用法に関する差異が存在すると言えるかもしれない。日本語にすれば、「公にする」ということだが、〈公〉の中に何が含まれているかが問題である。近代における“make public”や“publish”の意味範囲は、現代から見て常識的な「出版印刷」——“publication”や“publishing”——に関わるものであり、この領域

4 Carol V. Kaske, “Spenser’s *Amoretti* and *Epithalamion* of 1595 : Structure, Genre, and Numelology,” *English Literary Renaissance*. Vol. 8. No. 3 (Autumn 1978), 271-295; Alexander Dunlop, “Number symbolism, modern studies” in Maren-Sofie Røstvig, “Number symbolism. tradition of”, Albert Charles Hamilton (ed.), *Spenser Encyclopedia* (Toronto: University of Toronto Press, 1990), 512-515. 数秘学的要素はシドニー作品にも見出されるが、その扱いはスペンサーに比べるとかなりシンプルなものに思える。

5 ただし、イタリアにおけるルネサンスとイギリスにおけるルネサンスはその意味合いが大きく異なるはず、というのが筆者の持論である。端的に言えば、イタリアのルネサンスは基本的に過去の自文化の復活を目指すものであるが、イギリスのルネサンスはイタリアのルネサンスを（フランス、オランダ等を経由して）移植しようとするものであり、その意味において多層的な異文化の導入であると言わざるを得ない。実際、ソネットのイギリスへの導入はこうした文化現象の典型と述べることができるかもしれない。

で前提とされている〈公〉は活字文化構成員全体——文字を読めない個人や社会層もいるが、理念的には、社会の全構成員——を指す。一方、初期近代のイングランドには、古代・中世から引き継がれた手稿文化と150年ほど前のドイツでのグーテンベルクによる発明に端を発する活字文化が併存していた時期がある⁶。初期近代の結構な部分が、〈公〉を手稿文化の構成員と考えていただろうことは驚くに値しない。このような場合、手稿文化における“make public”あるいは“publish”はどのような状況を表現するのだろうか。「披露する、見せる」ということでしかないかもしれないが⁷、「特定の状況で」とか「特定の相手や人々に対して」といった限定を必要とするようにも思われる。手稿文化における〈公〉はかなり窮屈そうに思える。

初期近代の手稿文化は、この時代の作品の研究者に多くの留意点を突き付けてくる。最大の問題は、作者と作品の帰属の問題である。現在ではかなり整った作品集が出版されている詩人の作品群であっても、原稿・資料の集積や編集の時点では、手稿に依存する必要があった。手稿にも——日記や備忘録に似たものから、現代で言う〈プロ〉の写字生の筆になる贈答用の彩色写本まで——様々な形態が存在する⁸。そうした中で、詩の帰属の確定に関わるような状況を念頭に考えてみると、手稿原稿は(本

6 近代の進行につれて手稿文化は活字文化に駆逐されていくが、カリスマ性を持つテキストなど、それなりの存在意義もあって、現代に至るまで、完全に消滅してしまっただけではない。

7 Patricia Fumerton, *Cultural Aesthetics: Renaissance Literature and the Practice of Social Ornament* (Chicago: U of Chicago P, 1991) pp. 63-110 [生田省悟, 箭川修, 井上彰訳, 『文化の美学——ルネサンス文学と社会的装飾の実践』。東京: 松柏社, 1996年, pp. 103-170] を参照のこと。

8 箭川修, 「〈文化の美学〉と『アストロフェルとステラ』」 pp. 185-204 [四二つの文化——手稿と活字]。『新歴史主義からの逃走』東京: 松柏社, 2001 を参照のこと。

人が書いたか、本人の監修・監督のもとで書かれた）オリジナルと言えるものとその二次的・三次的な写しということになるだろう。いずれにしても（日記や備忘録のように、書きつけた日時が書き込んであるものでなければ）手稿の作成年は確認困難である。ちなみに、手稿は下流に向かうほど（二次。三次と進んでいくと）オリジナルとの差異が大きくなる。どこかの手稿に残った詩のテキストがこれまでに存在していたテキストと比較検討され、源流への近さが判定される。その際、詩のテキストに創作した詩人の名前が明記されていることはそれほど期待できない。テキストによって作者が特定できる可能性が高くなるのは活字印刷が作者の許諾の元に行われるという形態が成立するのを待つ必要がある。手稿のどこかに記載されている（かもしれない）年号などを手掛かりに作品の創作年代を推定し、手稿の筆跡を調べることで信頼のできる手稿なのかを判定し、他の詩人からの流用でないのかなどを確認しながら、慎重に出版用の原稿が構築されていく。

3. Sir John Davies という詩人

本稿が対象としている詩人が Sir John Davies であることは第 1 節で明らかにしたが、前節に見たような文化状況のもと、相手にしようとしている初期近代イギリスには少々ややこしい詩人群がいる。John Davies of Hereford (c. 1565-1618), Sir John Davies (1569-1626), John Donne (1573-1626) である。この 3 人の詩人は、生年にして 8 年以内、没年にして 13 年以内に活動していた⁹。John Davies of Hereford と Sir John Davies が紛らわしい

9 3 人の詩人の略歴を、生没年の部分を簡略化しつつ、英語版 Wikipedia から転載する。

John Davies of Hereford (c. 1565-July 1618) was a writing-master and an Anglo-Welsh poet. He referred to himself as John Davies of Hereford (after the city

ことは一目瞭然 (?) だろうが、なぜここに名前がまったく異なる John Donne が加わってくるのか、こうした疑問が浮上するのは、現代の私たちが、多大な労力をかけた作品編集・編纂の果てに位置していることを忘却しているためだ。手稿に掲載された詩作品の作者名がまったく書かれていないものも多い（現代に至るまで確認不可能な場合には“Anonymous”ということになる）が、イニシャルによる表記だけということも往々にしてある。John Donne が二人の John Davies と混同される可能性が出てくるのはここにおいてである。3 人の詩人はすべて “J. D.” —— 当時のスペリングの慣習に従うならば、“I. D.” —— と表記されてしまう。見分けるための手掛かりはいくつかあり得る。手稿が保存されていた場所（貴族の屋敷等）は詩人の直接的・間接的交友関係と関わっている可能性が高く、人間関係や当時の出来事 —— 「この詩人は****年のクリスマスにこの貴族に招待されていた」 —— などを仔細に検討・検証していけば、何らかの筋が見えてくる可能性がある。とは言え、どんな詩人であれ、例えばソネッ

where he was born) in order to distinguish him from others of the same name, particularly the contemporary poet, Sir John Davies (1569-1626).

Sir John Davies (1569 (baptized)-1626) was an English poet, lawyer, and politician who sat in the House of Commons at various times between 1597 and 1621. He became Attorney General for Ireland and formulated many of the legal principles that underpinned the British Empire.

John Donne (1573-1631) was an English poet and cleric in the Church of England. He is considered the pre-eminent representative of the metaphysical poets. His works are noted for their strong, sensual style and include sonnets, love poems, religious poems, Latin translations, epigrams, elegies, songs, satires and sermons. His poetry is noted for its vibrancy of language and inventiveness of metaphor, especially compared to that of his contemporaries. Donne's style is characterized by abrupt openings and various paradoxes, ironies and dislocations. These features, along with his frequent dramatic or everyday speech rhythms, his tense syntax and his tough eloquence, were both a reaction against the smoothness of conventional Elizabethan poetry and an adaptation into English of European baroque and mannerist techniques.

ト集を構成する作品のすべてがどこかの貴族の手稿の中に揃って保存されている、というような状況は想像しがたい。詩のテキストは分散して、場合によっては異なる詩人たちの作品を混在させた個人的な選集の中に存在しているかもしれない。その際に作品の著者名がイニシャルだけに過ぎなくとも手稿の片隅に書き込まれているようなことがあれば望外の事態であろう——下手をすると、イニシャルは手稿を作成した本人の簡易的な署名という場合さえあるかもしれない。

ディヴィーズ卿の詩が「編纂」されるようになったのは 19 世紀のことで。創作の起源へと遡る過程で幾つもの手稿を確認するための労力を想像すると気が遠くなる¹⁰。

ここでディヴィーズ卿の生涯を簡単に紹介しておく。

1588 年以降ロンドンの法学院のひとつ Middle Temple に所属。

1590 年頃に *Epigrammes* を執筆。

1594 年の早い時期に *Orchestra* を執筆。出版は 1596 年。ダンスを主題としたこの詩を当時の人々は“frivolous”（軽薄）と評した。

1595 年に弁護士資格を取り、法律家として活動を開始。

1598 年に弁護士資格停止、理由は *Orchestra* の献呈先でもあった同じ法律家 Richard Martin —— 後にロンドン市法律顧問 Recorder of London になる —— を食事中に襲撃し、棍棒で頭を殴打したため。

1594 年に *Gulling Sonnets* を出版。

1599 年に *Nosce Teipsum*（汝。自身を知れ！）を出版。

10 Alexander B. Grosart (ed.), *The Complete Poems of Sir John Davies*. in 2vols (London: Chatto and Windus, 1876).

*Elizabeth 女王はディヴィーズの詩を高く評価 —— どこから評判を得たのかは不明！

1599 年に acrostic を用いた *Hymns of Astraea* を出版し、エリザベスに追従。

1601 年に弁護士資格を回復 —— 王爾尚書 Egerton 公の助力を得、マーティンに直接謝罪を行った後。

1601 年に下院議員となる。

1603 年にエリザベス女王の没後、(James I として即位すべくイングランドに向かっていた) スコットランド王 James VI を国境まで出迎えに行く。

*この際に。ジェイムズはディヴィーズに「*Nosce Teipsum* の作者なのか」と尋ねたと言われる。このエピソードは、詩が —— イングランドとスコットランドの国境をさえ越えて —— 社会的な機能を果たしていたことを示している。ジェイムズがディヴィーズを重用することになった動機のひとつに詩人としての才能が関係していることは明らかだろう¹¹。

4. ソネット集 *Gulling Sonnets* (1594)

(A) *Gulling Sonnets* は何をしている？

『ガリング・ソネット』を“mocking Petrarchan conventions in Elizabethan sonnets”と評する批評家もいるが、中途半端なまとめを行うよりは、『ガリング』が語っていることや行っていることを確認するのが望ましいと思

11 ディヴィーズと同じような状況にあり、同じような期待を抱きながらもジェイムズに気に入られなかった詩人もいる。Sir Walter Raleigh (1554-1618) である。ローリーは詩人というよりもより実質的な（損得上の）期待をジェイムズに持たせてしまったのかもしれない。

われる。まずは、デヴィーズ卿が自らのソネット集を修飾するために付した“Gulling”がどのような意味なのかを OED で確認してみる。“gull. v.³”には、1. *trans.* To make a gull of, to dupe, cheat, befool, ‘take in’, deceive. Also *absol.*, to practice cheating. †2. To deprive of by trickery or deception; to cheat out of. *Obs.* とあり、“gulling. *ppl. a.*²”には、“That gulls or deceives; cheating, deceptive”とあった後に、“?1519 Davies (*title*) Gullinge Sonnets. in *Poems* (Grosart, I. 51) と出典が添えられている。

『ガリング』の献呈ソネットの宛先、すなわち、ソネット集の献呈相手も確認しておこう。Sir Anthony Cooke (1555-1604) は、Edward VI の個人教師をも務めた同名の著名な人文主義者を祖父¹²に持ち、Robert Cecil¹³ および Francis Bacon¹⁴ の従弟に当たる。スペインの Cadiz で Earl of Essex, Robert Devereux (1566-1601) の元で戦い、1596 年にナイト爵に叙されており、1594 年には Michael Drayton が *Ideas Mirror* を献呈している。

この人物を念頭に、献呈ソネットは何を語るのか。内容理解の補助的手段として散文パラフレーズを提示する。

1. Here my Chameleon Muse changes herself to diverse shapes of gross absurdities, and (like a motley-dressed jester or fool) mocks the fond admirers of lewd gulleries with strange fashion.
2. Your judgment sees the bastard sonnets of the base Rhymers with pity and with scorn; which [the bastard sonnets] are (in this speedy/rash age) daily born and shame themselves and disgrace poetry.
3. Yet. some will praise those bastard sonnets, and some perhaps will praise

12 Sir Anthony Cooke (1504-1576).

13 Robert Cecil. 1st Earl of Salisbury (1563?-1612). エリザベス 1 世の寵臣であった Burghley 卿 William Cecil (1520-1598) と 2 番目の妻 Mildred Cooke (1526-89) との間の子。

14 Francis Bacon (1561-1626). イギリス経験主義哲学の祖と称される。母 Anne (Cooke) Bacon (c. 1528-1610) の姉 Mildred が William Cecil に嫁いだ。

Sir John Davies の *Gulling Sonnets* (1594)

even these sonnets of mine : therefore I dedicate these sonnets to you
who spend your glorious days in court ;

4. So that you may thus set to school this formal wit, use your own grace, and
call him a fool, if some rich and rash gull commend these rhymes.

詩人の立場で語られるのは —— 理解のために若干の脚色を加えたが —— おおよそ以下のような話である。1. 変幻自在の私の詩神は、野卑で馬鹿げたものに姿を変え、低劣なごまかし作品を愚かにも賞賛している輩たちをからかう。2. 献呈相手のクック卿の眼力は、群小詩人たちが創作するソネットが *bastard* (庶子>粗悪品) であることを明らかにするが、そうした粗悪品は日々生産されており、自ら恥をさらすのみならず、〈詩〉それ自体を汚してしまう。3. しかも、粗悪品を称賛する人々が出てこないとも限らない。下手をすると、粗悪品を揶揄するためにふざけて書いた私のソネットを真に受けて「すごい」と褒める人さえ現れるかもしれない。だから、宮廷で活躍されているクック卿にこのソネット集を献呈させて頂くのです。4. もしどこかの羽振りがいいだけの粗忽者が私の作品を「なかなかいいよ」などと口にすることがあれば、あなた様から真実を明らかにして頂いて、そいつを馬鹿者と呼んでくださるようになります。

論点を整理しよう。ソネットには —— 優れたソネットと粗悪なソネットの —— 2 種類がある。粗悪なソネットを創作するヘボ詩人も多いが、粗悪なソネットを粗悪と判断する鑑識眼・識別力を持たない人々も多い。そうした状況を憂う詩人は、パロディ的手法で粗悪さを模倣する皮肉なソネットを創作してみた。しかし、その粗悪さも、鑑識眼・識別力を持たない人々によって賞賛されるというさらに皮肉な結果に至る可能性がある。だから、これらの作品の成立事情をこの献呈ソネットに記しておきますので、クック卿あとはどうぞ宜しく、といった具合だろう。

粗悪品が日々生産されているという状況が存在したことを裏書きするように、この時代には——恐らく Sir Philip Sidney, *Astrophel and Stella* (published, 1591; composed, 1580s) を契機として——連作ソネットの一時的大流行 “Sonnet craze” が発生したとされる。同時代に出現したソネット作品としては、連作ソネットに限定するとしても、Edmund Spenser, *Amoretti* (published 1595; composed 1594); Samuel Daniel (1562-1619), *Delia* (1592); Michael Drayton (1563-1631), *Idea* (1594; revised 1619); Barnabe Barnes (c. 1569-1609), *Parthenophil and Parthenophe* (1593); Fulke Greville, Lord Brooke (c. 1554-1628), *Caelica* (published posthumously, 1633) などが挙げられる¹⁵。

問題は、パロディ的手法で模倣されている粗悪なソネットとはどのようなものかということになるだろう。*Gulling Sonnets* のパロディの矛先として広く認定されているのは作者不詳の *Zepheria* (1594) である。実際、*Gulling Sonnets* の第7番から第9番には *Zepheria* に対する言及が夥しい。しかしながら、*Gulling Sonnets* が9篇で、*Zepheria* が40篇であるという不均衡、さらには前者が純粋なソネット集であるのに対して、後者が “Canzon”¹⁶ という名称の下に様々な長さの詩を収めているという状況もあり、*Gulling Sonnets* が *Zepheria* のどの箇所を揶揄しているのかを具体的に列挙や証明を行うことは極めて困難に思える。“Mocking Petrarchan conventions in Elizabethan sonnets” で言及されている「ペトラルカ的慣習」は比喩や修辭的技法の部分に限定されるものなのだろうか。

15 エリザベス朝のソネットに当たるには、Sonnet Central というサイト内のページ (<http://www.sonnets.org/eliz.htm>) が便利。

16 イギリス風の “Song” や “Sonnet” ではなく、ペトラルカが自作に用いた “Canzoniere” を想起させる名称を利用していること自体がペトラルカへの傾斜を示していると言えるだろう。

(B) *Gulling Sonnets* の目的は何？

連作ソネットとは言い難い *Zepheria* を揶揄するために—— 献呈詩を含めて 10 篇という短かさとはいえ—— 連作ソネットという形式をパロディ的に用いて行おうとしたのはなぜだろう。シドニー卿の *Defense of Poesy* (published 1595 ; composed c. 1579) の創作の引鉄になったと言われる Stephen Gosson (1554-1624) の詩歌不要論のように、純然たる否定・拒絶としてソネットという形式に批判を加えることも可能だったはずだ。ちなみに、当時の社会には、宮廷人には学芸は不要であるとする論が頻出していたが、そもそも詩人であるデヴィーズ卿にそうした批判は困難であると推定したとして、ソネット以外の形式を用いて、「ソネットという慣習的形式には問題があるので、私は違うものを選ぶ」などと発言すれば問題はなさそうに思われる。

そもそも Sonnet craze はどこに発生したのだろうか。手稿の流通を通じて貴族社会に発生したのだろうか、活字印刷を通じてブルジョアから一般市民の間に発生したのだろうか。詩歌それ自体、また、詩歌を自在に操る能力を持つ詩人が貴族社会において重要な役割を担っていたことを重要に捉えるべきだろう。その典型的かつ象徴的な存在が「桂冠詩人 (Poet Laureate)」という制度である。例外が存在していることは当然だろうが、桂冠詩人は君主ないし国家が認定し、年金を支給する。詩人はそれと引き換えに冠婚葬祭や重要な国事に際して記念・祈念の詩を創作することが求められる。

君主・国家に桂冠詩人が対応するように、秀でた詩人は有力貴族の宮廷に依存する。有力貴族もより優れた、より評判の高い詩人を囲い込もうとする、社会的上昇を目論む詩人（ないし詩才ある若者）は手紙を送り、自らの詩を献呈することで貴族に認知してもらおうとする。こうした状況で

活動する詩人（ないし詩人の卵）に必要とされるのは即時性・即応性であろう。貴族の求めに応じて、澁みなく詩行を繰り出していく才能は何よりも高く評価される。臆面もなくおべっかを語り、絢爛至極の修辞を駆使することも必要だろう。

まさにこうした能力を培うために存在していたのが当時の Grammar school であるとも言えるかもしれない。Oxford や Cambridge などの有名大学、あるいはロンドンに4つ置かれていた法曹学院（Lincoln's Inn / Inner Temple / Middle Temple / Gray's Inn）への予備校といった社会的な位置付けかもしれないが、そこでのカリキュラムがまさにラテン語の読み書きを中心に据えていたことには言及しておく価値があるだろう。

法曹学院での業務がもっぱら法律や訴訟に関わるものであり、広い世界への拡散を目指すものではないということを考えても、必要とされていたメディアは出版ではない。また、出版しようとする決意と実際の出版の間に時間差が存在せざるを得ないという事実は、即時性・即応性を阻害する決定的な要因となる。さらに、詩人としての活動に話を限定するならば、無名詩人の詩集の予約出版に支出しようとする潜在的購買層が厚いはずはないし、自費出版では自らの懐を痛めることになる。貴族の宮廷近辺での手稿による流通を経て、なお魅力を失わない詩が集積され、その時点での潜在的后援者たる貴族に宛てた献辞を付して詩集として出版される、というのが出版に至る常道かもしれない。

だがそもそも、シドニー卿の『アストロフェルとステラ』やスペンサーの『アモレットィ』といったソネット集はディヴィーズ卿が批判すべきものになっている（墮している）だろうか。墮しているとすれば、恐らくディヴィーズ卿の批判は、ソネットにおけるペトラルカ的慣習のみならずソネット全般に及ぶことになるであろう。

5. 真剣な批判なのか？ 時流に乗ろうとしているだけか？

ディヴィーズ卿の詩のスタイルはどのように評価されてきただろうか。パロディという手法・方法論の検討も重要である。近代は「オリジナリティ (original/ originality)」を重視し、オリジナルでないものは、「創造性 (creativity)」の欠如を暗示する。これは出版という形態が確立し、著作権によって著作物が保護されていることが前提となる。つまり、著作物の周辺には土地を切り分ける柵のような境界線が引かれており、著者本人以外の誰かがこの内部から何かを「取ってくること」は、「盗ってくること」になり、「剽窃、盗作、盗用 plagiarism」として断罪されてしまう。しかし、こうした著作権の問題は、ルネサンス／初期近代においては極めて微妙である。第2節で見たように、ルネサンスでは“publish”の意味が曖昧であった。私たちは手稿の流通と印刷出版という2つの領域がまさに「文化」として併存していることを理解する必要がある。「文化として」という言い方をしたのは、手稿の流通は貴族の贈与の文化に組み込まれており、印刷出版は新興ブルジョア階級の骨格とも言える経済的取引として文化の一部をなすものだからである。この2つの文化は完全に分断されているわけではない。経済的取引によって入手した著作物（とりわけ、出版部数が少なく希少価値があるものや—— 予約出版が主流であった当時の出版慣習によって—— 入手困難な新刊本、人気本など）を贈答に用いることも十分に考えられるし、当時の著作物、とりわけ多くの詩集は、その冒頭部分に、贈与の文化に根差す「献辞」が付されている場合が多い。近代小説では、作者が家族の誰かの名前を作品の冒頭に掲げることはないわけではないが、ルネサンスのような「献辞」が付されることはない。仮にあるとすれば、それはかなり奇妙な外観を呈すであろう。

改めてディヴィーズ卿による、パロディによるソネット創作が提起している可能性を検討してみよう。1) ソネット形式全体を無用な社会的装飾として葬り去ろうとしているのか。2) 上質なソネットと下等（下劣?）なソネットの間に線引きを行い、前者を称揚し、後者を愚弄しようとするものなのか。3) （パロディであろうがなかろうが）新たなソネット作品を社会的な流通の過程に投企することが詩全般・学芸全般という社会的資本を増大させる要素となり、そのサイクルの中に自らを投じることで、さらなる需要と供給を喚起しようとするものなのか。

ペトラルカ主義が問題の場合——なぜ問題にされなければならないのかという疑問は将来に向かっても答えられそうにないが——批判の仕方にもいくつかの方法が考えられる。1) 「怪しからん」と（表立って表現するかどうかは別にして）批判し——例えば、純粋にイギリス風ソネットなどのような——代替的方策を提示する。2) 『ガリング』のようにパロディ化することによって対象の矮小化を目論む。3) 黙殺を決め込む、というのも批判のひとつであるかもしれないが、意見を持たない者や状況を理解していない者の沈黙との区別は困難である。

『ガリング』の献呈詩は。ディヴィーズ卿が嬉々として創作に取り組んでいる様子を伝えている。パロディは苦々しい思いで行なわれているわけではなさそうだ。ならば、こうした状況は次のように提示できるかもしれない。ソネット集『ゼフェリア』が世に出た時——あるいは「出ようとした時——ディヴィーズ卿は『ゼフェリア』が、自分が本領とする領域である法律用語を多用していること、『ゼフェリア』というペトラルカ主義を前面に出したパロディ兼オリジナルを超えるパロディを作成することで自分の詩的技量ないしオリジナリティを世間に広く——とりわけ自身の社会的活動に好影響をもたらすであろう貴族諸氏に——知らしめる機

会が訪れた、とほくそ笑んだのではないだろうか。

6. *Gulling Sonnets* は何をどのように語る？

批評的に辛いのは、パロディであることが事実であるとしても、『ガリング』の一篇一篇が必ずしも『ゼフェリア』中の特定の詩に言及しているようには見えないことである。『ガリング』はどのような特徴を有し、何をしようとしているのだろうか。散文へのパラフレーズを利用しながら、それぞれの詩を簡単に解釈してみたい。

Gulling 1.¹⁷

-
- 17 *Gulling Sonnets* からは、Robert Krueger 版から〔大意〕を利用して引用する。また、『ゼフェリア』のテキストは——『ガリング』の可能的なパロディ元を消去しないように——Margaret Christian, “*Zepheria* (1594); STC 26124): A Critical Edition.” *Studies in Philology*. vol. 100. No. 2 (Spring, 2003) pp. 177-243 に最小限の現代化を加えて提示する。*による注はクリスチャンから転載。

But if with error and unjust suspect
Thou shalt the burden of my grievance aggravate.
Laying unto my charge thy loves neglect.
A load which patience cannot tolerate :
First to be *Atlas* to mine own desire.
Then to depress me with unkind construction
While to mine own grieves may I scarce respire :
This is to heap *Ossa* on *Pelion**¹.

Oh would the reach yet of unequal censure
Might here but date his partiality :
Mistrust, who near is ripe till worst be thought on.
Hath my crime racked, yet to more high extensure*².

And now 'tis drawn to flat Apostasy :
So straight beset, best I lay hold on pardon.
Why then since better is it a penitentiary
To save than to expose to shame's confusion :
Thy face being veiled, this penance I award.
Clad in white sheet thou stand in Paul's Churchyard.

heap on *Ossa* on *Pelion These two mountains, first piled on one another
in Virgil's *Georgics*, are proverbial : to add difficulty to difficulty ; to add to

The Lover, [being] under the burden of his Mistress's love (which oppressed his heart like Etna), gave such pitiful groans that he at length moved the heavens to pity his distress.

But, because the Fates in their high Court above forbade to make the grievous burden less, all the kind Powers conspired to prove if [some] miracle might redress this mischief :

Therefore, [the Powers] regarding that the load was such as no man might sustain with one man's power and that mild patience should be imported much to the person who should endure an endless pain :

By their decree, soon he was transformed into a patient burden-bearing Ass.

〔大意〕恋する男がいた。男は愛する女性の愛に（エトナ山に押し掛かれるように）押し潰され、哀れな呻き声を挙げた。その声が天に届く。しかし、運命の女神たちは天国の高等法廷において重荷を軽減することを禁じる——撤回不可能な——評決を出したため、心優しい神々たちは力を合わせ、何らかの奇跡を起こしてひどい状況を改善しようと企む。神々たちは重荷が人間には背負えないくらい重すぎ、永遠に続く苦痛を抱える人間には忍耐力を備えてやるべきだと考える。神々たちの判決に従って、男はすぐに忍耐強い荷役の驢馬に姿を変えられた。

Fates が構成する high Court やその判決に対する Powers の対処案に対する言及が、作者が法律関係者であることを示唆していると思われるが、この詩の本領は逆説的な痛快さにある。人間では重荷を背負うのが辛いだろうから驢馬にしてやった、というのはオヴィディウス Ovid の *Metamorphoses* 『転身物語』を原型とするパロディとして十分に機能している。

what is already great.

*2 **extensure** the condition of being extended or strained ; extent, OED quotes this line as its earliest example.

Gulling 2¹⁸

As when the bright sky has not defaced his glory with black clouds, so my thoughts were void of all discontent ;

And, without mist of passions, all my thoughts were pure and clear, till at last an idle thought, without anxiety, went wandering forth, and took a taste of that poisonous beauty which torments the hearts of lovers so much :

Then, as it happens in a flock of sheep that (when some contagious ill begins first in one sheep) it daily spreads and secretly creeps till all the troop are overtaken,

So one scurvy thought infects all the rest by close neighborhood within my breast.

〔大意〕輝かしい天空が黒い雲によって太陽の美しさを汚したことがないように、私の思いに不満など欠片もない。また、情欲という霧が存在しないため、私の思いはどこも純粋で一点の曇りもない。と、そうこうするうちに、不安があるわけでもないのに、無益でお気楽な思いがさ迷い出て、恋する者の心を悩ますような有毒な美を口にしてしまった。すると、(伝染性の病が群れの一头に始まると)日に日に拡大し、じわじわと進行して、ついには群れの全体に蔓延してしまう、などということが羊の群れに起こるように、一つの思いが——私の胸の中ですぐ近くにあるため——ほかの思いのすべてに感染してしまうのだ。

前半 8 行の “As when ... So ... till” は後半部分の “Then as ... When ... Till ... So” に対応しているように見える。しかし、前半部の As ... so は so が when に対する帰結を持たないため、比喩として完結していない。また、till は so の節の下位に置かれている。後半部の so はその下位に when 節を持つが、till はさらに when 節の下位にある。13 行目の So は 12 行末のピリオドによって、前半の so と接続される可能性を見せるが、実際には後半部分の so と対応している。結果、前半部分の As ... so と後半部分の As ... so は独立した単位の内部に置かれることになる。この前半 8 行と後半 6

18 Cf. Dorus's song, 'My sheep are thoughts' in *Old Arcadia*, book ii.

行の間に volta が存在する。それなりに連携する意味の展開が読み込めるかを検討してみたが、両者は単なる並置にとどまっているように思える。

Gulling 3¹⁹

- ²⁰ What Eagle can see her sun-bright eye?
Her sun-bright eye, which lights the world with love.
The world of Love in which I live and die.
I live and die, and try diverse changes ;
I try changes, but I am still the same.
I am the same and never will change.
I never change until my soul flies away.
My soul flies away, and I cease to move ;
I (who am moved by you) cease to move.
I am moved by you (who move all mortal hearts).
All mortal hearts (the eyes of those view your eyes).
Your eyes view (from your eyes Cupid shoots his darts).
Cupids shoots his darts from your eyes and wounds those.
Who honor you and were never Cupid's foes.

この詩は徹底的な〈前辞反復 anadiplosis〉の連続で構成されており、話者の修辞的能力を見せつけるという意図を有しているように思われる。

Gulling 4²¹

-
- 19 “Davies combines the conventions of the eagle beholding the sun with that of the mistress’s sunbright eye”, as in Watson’s *Hekatompathia* 99, and Drayton’s *Idea* 56. The device of gradation, frequently used in sonnets, as in *Astrophil and Stella* 1 and 68, and *Hekatompathia* 68 is expanded extravagantly and cleverly made ridiculous by Davies’s carrying over almost half of each line of verse. He thus takes almost twice the necessary space to present a set of conventional contrarities which succeed brilliantly in saying nothing” (Krueger, p. 392. n3).
20 この詩はパラフレーズにそれほどの価値はなさそうである。
21 For similar imagery, see Fletcher, *Licia* 7 and Spenser, *Amoretti* 18 and 30.

When the all-seeing eyes of heaven saw the hardness of her heart and truth of my heart, they immediately concluded that by divine power our hearts should be turned to other forms.

Then her heart, as hard as flint, became a flint, and my heart, as true as steel, was turned to steel ; and then the flame of kindest love sprang forth between our hearts, and it burned unextinguished.

And the sacred lamp of mutual love burned incessantly long in bright glory.

Until my folly moved her fury to return my service with despite, and to put out the lamp of love with snuffers²² of her pride (otherwise, lamp else would never have extinguished).

Gulling 5 ²³

My eye saw her face which charmed me ; My ear heard her speech which pleased me ; My will liked her fashion which delighted me ; My wit discerned her judgement which confounded²⁴ me ; My heart loved her art which moved me.

Then, Fancy drew so much that she was persuaded to think me kind ; Humor forced so much that she was moved to think me true ; Love enticed so much that she was carried to think me comely ; Conceit persuaded so much that she was compassed to think me valiant ; Thought devised so much that she was wrought to think me wise.

So much so that, Heaven worked to make me scorned by her ; Earth con-

22 *snuffer* : a small hollow metal cone on the end of a handle, used to extinguish a candle by smothering the flame (ODE).

23 Correlative verse (*carmen correlativum*) was highly fashionable in the late sixteenth century. Some examples include Philoclea's song, 'Virtue, beauty, and speech' in *Old Arcadia* book iii. Griffin's *Fidessa*, 47 and a poem sometimes attributed to Raleigh, 'Her face, her tongue, her wit,' William Ringler, Jr. in *The Poems of Sir Philip Sidney* (1961) p. 406 gives other examples. Hoyt Hopewell Hudson in *The Epigram in the English Renaissance* (1947) points out (p. 161) that the device was intended to provide compression ; Davies's parody succeeds partly by contravening this intent, and partly by increasing the number of correlatives to five, leaving no space to say anything.

24 *confound* : cause surprise or confusion in (someone), especially by not according with their expectations (ODE).

Sir John Davies の *Gulling Sonnets* (1594)

trived to make my love vile ; Hell labored to make light cast off ; My folly
conspired to make my life base ; and her pride swore to make my dear defied.

So that my heart grieves ; my wit laments ; my will sorrows ; my ear
despairs ; and my eye dies.

Gulling 6 ²⁵

The sacred Muse (who first made Cupid divine) hath made him naked
and without attire ; but I will clothe him with this pen of mine so that all the
world shall admire his fashion :

[I will make] his Hat *of* Hope. his Band [collar] *of* excellent Beauty. his
Cloak *of* Craft. his Doublet *of* Desire ; Grief shall twine about him for a Girdle.
his Points *of* Pride. his Ilet-holes [eyelet holes] *of* Ire. his Hose *of* Hate. his
Codpiece *of* Conceit. his Stockings *of* Stern Strife. his Shirt *of* Shame ; his
Garters *of* gay and slight vain-Glory. his Pantofels [overshoes] *of* Passions ;
Pumps of presumption and socks of exceedingly sweet sullenness shall adorn
his feet. ²⁶

Gulling 7 ²⁷

The wanton Cupid was admitted into the Middle Temple of my heart. and
gave your Eagle-sighted Wit for pledge so that he would not play any rude,
uncivil part.

-
- 25 The description of Cupid contains elements of two conventions. One is the blazon of Love, favourable, as in *F.Q.* III. xi. 47-8. and unfavourable, as in Dicus's description of him as horned and cloven-footed in 'Poore Painters oft' in *Old Arcadia*, book i. or Ronsard's 'Amour Oyseau'. The other is the allegory of courtly love, in which Cupid is Associated with personifications of such qualities as pride, hope, and ire (these qualities of course appear abundantly in Petrarchan sonnets). Davies's parody consists in dressing Cupid in garments that have no connection with the qualities except alliteration ; thus the sonnet is meaningless. and Cupid is wearing an unconscionable amount of footwear.
- 26 Socks were usually worn under boots (which Cupid is not wearing) to protect the stockings from being soiled or rubbed.
- 27 7-9. These sonnets mock the extensive elaboration of a single image in great literal detail. and the widespread use of legal conceits, as in Shakespeare, *Sonnets* 87. 134 ; Barnes, *Parthenophil*, sonnets 8-10, madrigals 2, 16 ; Drayton, *Idea* 2 ; Griffin, *Fidessa*, 5, 6 ; Percy, *Coelia*, 1 and especially *Zepheria* 5, 6, 20, 37 and 38.

Long time. Cupid hid his nature with his art, and there he, sad and grave and sober, occupied the seat ; but at last Cupid began to revel, to break good rules and to pervert orders.

Then Cupid and his young pledge [Wit] were both convened before serious-faced Reason, that old, grave Bencher²⁸, who presented unto Cupid this grave sentence through that sly and secretive knave, Diligence :

That Cupid and Wit should be expelled from the Middle Temple of my heart for ever.

Gulling 8

My case is this. I love Zepheria²⁹ brighte.
Of her I hold my harte by fealtye
Which I discharge to her perpetuallye.
Yet she thereof will never me acquite.
For now supposinge I withhold her righte
She hathe distrein'de³⁰ my harte to satisfie
The duty which I never did denye.
And far away impounds it with despite.
I labor therefore justlie to repleave³¹
My harte which she unjustly doth impounde
But quick conceit which now is loves high Shreife³²
Retornes it as esloynde³³. not to be founde ;
Then. which the lawe affords. I onely crave

28 法曹学院 (Inn of Court) 評議員。

29 *Zepheria* : a reference to the anonymous sonnet sequence that appeared in 1594 ; it uses legal conceits.

30 *distrein'de* : A legal term ; to distrain is to seize goods in order to force the owner to perform obligation. such as paying a debt or appearing in court ; or to punish him for not having done so.

31 *repleave* : to recover goods distrained, usually upon an undertaking to perform the duty required.

32 *Shreife* : a court officer whose duties include executing writs such as *replevin*. *replevin* : 【法律】(一般に) 動産占有回復 [返還請求] 訴訟 : 不法に奪われたり留置された動産の回復を求める訴訟。申立書 : 占有回復を命じる令状 ; コモン・ローの訴訟形式の一つ。

33 *esloynde* : removed out of the jurisdiction of the court or sheriff. *eloin* : 遠くへ持ち去る ; 隠遁する。

Sir John Davies の *Gulling Sonnets* (1594)

Her harte for myne in withername³⁴ to have.

Gulling 9³⁵

To Love my lord I doe knightes service owe
And therefore now he hath my wit in warde ;
But while it is in his tuition soe
Me thincks he doth intreate it passinge hard.
For thoughe he hathe it married longe agoe
To Vanytie (a wench of noe regarde)
And now to full. and perfect age doth growe.
Yet now of freedome. it is most debard.
But why should love. after minoritye.
When I am past the one and twentieth year.
Preclude my witt of his sweete libertye
And make it still the yoake of wardshippe beare?
I feare he hath an other Title gott
And holds my witt now for an Ideot.

M^r Davyes.

A Selected Bibliography

Primary Sources

Davies, Sir John. *The Complete Poems of Sir John Davies*. 2vols. Ed. Alexander B. Grosart. 1876.

———. *The Poems of Sir John Davies*. Ed. Robert Krueger. Oxford : Clarendon P.

34 *withername* : in an action of replevin. taking other goods in place of those eloigned.

35 The custom of wardship was a profitable one for the guardians and often a disadvantage to the wards. Technically, the Crown was the guardian of all minors who held land by knight-service (i.e. by a grant from the monarch in exchange for military service, which meant virtually all the knights and peers of the realm), all unmarried female orphans, and all idiots. In practice the Court of Wards granted guardianship to individuals, who could collect the income of the estates, and dowries, and whose consent was required for marriage and for selling the property. The number of appeals and complaints attests frequent conflicts of interest between guardians and wards.

1975.

Davies, John. of Hereford. *The Complete Works of John Davies of Hereford*. Vol. 2. Ed. Alexander B. Grosart. 1878.

Elizabethan Sonnets. Ed. Maurice Evans. London : J. M. Dent. 1977.

Percy, William. *The Sonnets of William Percy. 1594*. Ed. Alexander B. Grosart. 1877.

Sidney, Sir Philip. *The Poems of Sir Philip Sidney*. Ed. William Ringler. Oxford : Oxford UP. 1962.

———. *Sir Philip Sidney : The Countess of Pembroke's Arcadia (The Old Arcadia)*. Ed. Katherine Duncan-Jones. Oxford : Oxford UP. 1994.

———. *Sir Philip Sidney : The Major Works*. Ed. Katherine Duncan-Jones. Oxford : Oxford UP. 2002.

———. *A Defence of Poetry*. Ed. Jan van Dorsten. Oxford : Oxford UP. 1966.

———. *The Countess of Pembroke's Arcadia (The Old Arcadia)*. Ed. Katherine Duncan-Jones. Oxford : Oxford UP. 1985.

———. *The Countess of Pembroke's Arcadia (The New Arcadia)*. Ed. Maurice Evans. Harmondsworth : Penguin. 1977.

Spenser, Edmund. *Edmund Spenser : The Shorter Poems*. Ed. Richard A. MacCabe. Harmondsworth : Penguin. 1999.

———. *The Yale Edition of the Shorter Poems of Edmund Spenser*. Ed. William A. Oram, Einer Bjorvand, Ronald Bond, Thomas H. Cain, Alexander Dunlop, and Richard Schell. New Haven : Yale UP. 1989.

Zepheria. Reprinted From the Original Edition of 1594. Publication of the Spenser Society. 1869.

Elizabethan Sonnets. vol. 1. Intro. Sidney Lee. Westminster : Archbold Constable and Co., Ltd. 1904.

The Penguin Book of Renaissance Verse. Ed. David Norbrook and H. R. Woudhuysen. Harmondsworth : Penguin. 1992.

Petrarch in English. Ed. Thomas P. Roche, Jr. London : Penguin. 2005.

Silver Poets of the Sixteenth Century : Sir Thomas Wyatt, Henry Howard, Sir Walter Raleigh, Sir Philip Sidney, Mary Sidney, Michael Drayton and Sir John Davies. Ed. Douglas Brooks-Davies. London : J. M. Dent. 1992.

Secondary Sources

Anglo, Sydney, ed. *Chivalry in the Renaissance*. Woodbridge : The Boydell P. 1990.

Alexander, Gavin. *Writing After Sidney : The Literary Response to Sir Philip Sidney. 1586-1640*. Oxford : Oxford UP. 2006.

Attridge, Derek. *Well-Weighed Syllables : Elizabethan Verse in Classical Metres*. Cambridge : Cambridge UP. 1975.

Bednarz, James P. *Shakespeare & the Poets' War*. New York : Columbia UP. 2001.

- Bloom, Harold. *The Anxiety of Influence : A Theory of Poetry*. Oxford : Oxford UP. 1973.
———. *A Map of Misreading*. Oxford : Oxford UP. 1975.
- Brink, Jean R., and William F. Gentrup. eds. *Renaissance Culture in Context : Theory and Practice*. Aldershot : Scholar P. 1993.
- Burt, Stephen., and David Mikics. eds. *The Art of the Sonnet*. Cambridge. Mass. : Harvard UP. 2010.
- Buxton, John. *Sir Philip Sidney and the English Renaissance*. 3rd ed. London : Macmillan. 1987.
- Carpenter, Thomas, and Derek Attridge. eds. *Meter and Meaning : An Introduction to Rhythm in Poetry*. Abingdon : Routledge. 2003.
- Christian, Margaret. “Zepheria (1594 ; STC 26124) : A Critical Edition.” *Studies in Philology* 100. No. 2 (Spring. 2003). 177-243.
- Cousins, A. D. and Peter Howarth. ed. *The Cambridge Companion to the Sonnet*. Cambridge : Cambridge UP. 2011.
- Dubrow, Heather. *Echoes of Desire : English Petrarchism and Its Counterdiscourses*. Ithaca : Cornell UP. 1995.
- Eagleton, Terry. *How to Read a Poem*. Blackwell. 2007.
- Farmer, Norman K. Jr. *Poet and the Visual Arts in the Renaissance England*. Austin : U of Texas P. 1984.
- Fowler, Alastair. *Triumphal Forms : Structural Patterns in Elizabethan Poetry*. Cambridge : Cambridge UP. 1970.
- Fraistat, Neil. ed. *Poems in Their Place : The Intertextuality and Order of Poetic Collections*. Chapel Hill : The U of North Carolina P. 1986.
- Fumerton, Patricia. *Cultural Aesthetics : Renaissance Literature and the Practice of Social Ornament*. Chicago : U of Chicago P. 1991. [生田省悟. 箭川修. 井上彰訳. 『文化の美学—ルネサンス文学と社会的装飾の実践』. 東京 : 松柏社. 1996 年]
- , and Simon Hunt. eds. *Renaissance Culture and the Everyday*. Philadelphia : U of Pennsylvania P. 1999.
- Fussell, Paul. *Poetic Metre and Poetic Form*. Rev. ed. McGraw-Hill. 1979.
- Greene, Donald. *Post-Petrarchism : Origins and Innovations of the Western Lyric Sequence*. Princeton : Princeton UP. 1991.
- Guillory, John. *Poetic Authority : Spenser, Milton and Literary History*. Columbia UP. 1983.
- Heninger, S. K., Jr. *The Cosmographical Class : Renaissance Diagrams of Universe*. San Marino : Huntington Library. 1977.
- , *Sidney and Spenser : The Poet as Maker*. University Park : Pennsylvania State UP. 1989.
- , *The Subtext of Form in the English Renaissance : Proportion Poetical*. University Park : Pennsylvania State UP. 1994.
- , *Touches of Sweet Harmony : Pythagorean Cosmology and Renaissance Poetics*. San Marino : Huntington Library. 1974

Sir John Davies の *Gulling Sonnets* (1594)

- Hirsch, Edward, and Evan Boland. eds. *The Making of a Sonnet*. Norton. 2008.
- Hobsbaum, Philip. *Metre. Rhythm and Verse Form*. Routledge. 1996.
- Hollander, John. *Melodious Guile : Fictive Pattern in Poetic Language*. New Haven Yale UP. 1983.
- , *Rhyme's Reason*. 3rd ed. Yale UP. 2000.
- Kennedy, William J. *Rhetorical Norms in Renaissance Literature*. New Haven. Yale UP. 1978.
- Levin, Phillis. ed. *The Penguin Book of the Sonnet : 500 Years of a Classical Tradition in English*. Penguin. 2001.
- Low, Anthony. *The Reinvention of Love : Poetry, Politics and Culture from Sidney to Milton*. Cambridge : Cambridge UP. 1993.
- Marotti, Arthur F. *Manuscript, Print, and the English Renaissance Lyric*. Ithaca : Cornell UP. 1995.
- Martines, Lauro. *Society and History in English Renaissance Verse*. Oxford : Basil Blackwell. 1965.
- Maynard, Winifred. *Elizabethan Lyric Poetry and Its Music*. Oxford : Clarendon P. 1986.
- Pawlish, Hans S. *Sir John Davies and the Conquest of Ireland : A Study in Legal Imperialism*. Cambridge : Cambridge UP. 1985.
- Reed, Edward Bliss. *English Lyrical Poetry : From Its Origins to the Present Time*. New Haven : Yale UP. 1912.
- Reese, Guetave. *Music in the Renaissance*. Rev. ed. New York : W. W. Norton. 1959.
- Roche, Thomas P. Jr. *Petrarch and the English Sonnet Sequences*. New York : AMS P. 1989.
- Rose, Mark. *Heroic Love : Studies in Sidney and Spenser*. Cambridge, Mass. : Harvard UP. 1968.
- Sanderson, James L. *Sir John Davies*. Boston : G. K. Hall & Co. 1975.
- Saenger, Michael Baird. "Did Sidney Revise Astrophel and Stella?" *Studies in Philology* 96-4 (1999) : 417-38
- Spiller, Michael R. G. *The Development of the Sonnet : An Introduction*. London : Routledge. 1992.
- Strand, Mark, and Evan Boland. eds. *The Making of a Poem*. Norton. 2000.
- Waller, Gary F. and Michael Moore. eds. *Sir Philip Sidney and the Interpretation of Renaissance Culture*. London : Croom Helm. 1984.
- Warley, Christopher. *Sonnet Sequences and Social Distinction in Renaissance England*. Cambridge : Cambridge UP. 2005.
- Woudhuysen, H. R. *Sir Philip Sidney and the Circulation of Manuscripts. 1558-1640*. Oxford : Clarendon P. 1996.
- 箭川 修. 「〈文化の美学〉と『アストロフェルとステラ』」. 『新歴史主義からの逃走』. 東京 : 松柏社. 2001.

A Selected Bibliography

- Bloom, Harold. *The Anxiety of Influence : A Theory of Poetry*. Oxford UP. 1973.
———, *A Map of Misreading*. Oxford UP. 1975.
- Burt, Stephen. and David Mikics. *The Art of the Sonnet*. Harvard UP. 2010.
- Cousins, A. D. and Peter Howarth. ed. *The Cambridge Companion to the Sonnet*. Cambridge UP. 2011.
- Fussell, Paul. *Poetic Metre and Poetic Form*. Rev. ed. McGraw-Hill. 1979.
- Guillory, John. *Poetic Authority : Spenser, Milton and Literary History*. Columbia UP. 1983.
- Hirsch, Edward. and Evan Boland. eds. *The Making of a Sonnet*. Norton. 2008.
- Hobsbaum, Philip. *Metre, Rhythm and Verse Form*. Routledge. 1996.
- Hollander, John. *Rhyme's Reason*. 3rd ed. Yale UP. 2000.
- Jones, Emrys. ed. *The New Oxford Book of Sixteenth-Century Verse*. Oxford. 1991.
- Levin, Phillis. ed. *The Penguin Book of the Sonnet : 500 Years of a Classical Tradition in English*. Penguin. 2001.
- Norbrook, David, and H. R. Woudhuysen. eds. *The Penguin Book of Renaissance Verse*. Penguin. 1992.
- Strand, Mark, and Evan Boland. eds. *The Making of a Poem*. Norton. 2000.